欧米における幼児教育の印象

宮内　孝

パリ　公立幼稚園園庭の輪遊び　3才児

私は昨年、教員養成を含めて、幼児教育の実情を調査するために欧米に旅行しました。その主なる国は、デンマーク・西独・オーストリア・イタリア・フランス・スイス・イギリス・米国などでした。これらの諸国をまわって見て、全体として感じたことは、大体において似ている点が多いということです。異なった点に視点をあてて見れば、各国ともそれぞれ違った独自の幼児教育の制度や方法で行なっていて、一つとして同じものはありませんが、大まかに見れば似かよっているし、似たような問題点を持っています。例えば、年令も大体三才から五才が中心で、そのうちでも五才児が最も多く就園しています。英国は二才～四才まで、ジュネーブは三才～六才までと義務就学の年令の関係上就園年令が違っていますし、米国ではキンダーガーテンといえば五才児で、それ以下はナーサリースクールに入るなどのちがいはありますが、大体就学前二、三年の幼児を就園させ、そのうちでも、就学前一年の幼児が最も多く入っています。

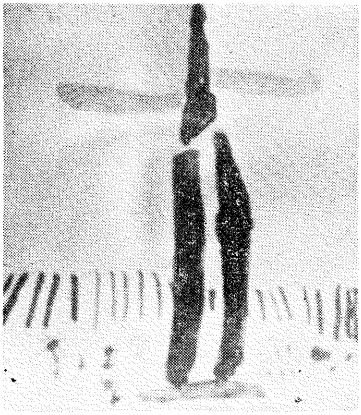
就園の年令は、就学前一年間の者が最も多いという点だけで、あまり似ていませんが、幼稚園への就園率は各国とも年々増加しています。そして、子どもを持つ親たちの意識に、一般社会の人を、特に行政にあたる人々がついていけない状態にあるということも共通しているようです。よい私立幼稚園から、誰でも入れる、やすい公立幼稚園へという傾向は、一般庶民の幼

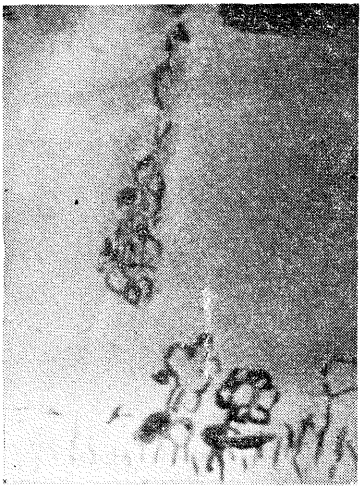
稚園教育に対する自覚が世界的にたかまりつつあることを物語っているようです。この傾向に対して、国家や地方公共団体の関係者の認識が不足しているので、どこの幼稚園へ行っても、それに対する不満の声を聞きました。特に著しかったのはフランスと英国でした。また、この傾向はスシ詰教育の増加をもたらしています。大きな部屋に小人数の子どもということを聞いていた私は、保育室が子どもでうずまっているのを見て驚かされました。フランスでは、幼児教育を軽視するといってドゴールを批判し、英国では高等教育のみを重視するといってその教育政策を批難していました。ローマでは午前午後の二部授業を行なっているし、ニューヨーク市も同様です。特に、ニューヨーク市の一六五幼稚園では、「この部屋は大きいので規定以上の四〇人を入れています」、「この部屋は教室ではないが空いているので使ったのですが、せまいので三〇人入れています」という説明でした。これらの国々で、「日本では、今年から幼稚園教育振興七ヶ年計画をたて、約三千の幼稚園を増設する予定だ」ということばが驚きとせん望の表情で聞きとられたことは当然でしょう。

さて、実際に見聞したことがらのうち、感じたこと、印象に残ったことなど想い出すままに具体的に述べましょう。

(1) 子どもの状態

欧州の子どもが一般におとなしいということは定評があります。私も同じような感じを受けました。これは人々全体があまりこせこせしないでおっとりしているといった全体的なふんいきから来るように感じました。なぜならば、例えば、乗物も混雑しないし、落着いたふんいきのあるパリの子どもと、乗物はこむし、全体的に落着きのないふんいきのあるローマの子ども





パリ　公立附属幼稚園　子どもの絵

とでは大分違った感じを受けたからです。子どもは少なく、あまり見かけないとよくいわれますが、それは都心部であって、裏町や住宅街には相当多く見受けました。そして道路や空地で遊ぶことはわが国の子どもとあまりかわりません。幼稚園内の子どもの状態はわが国とは相当違った感じを受けました。外来者を迎えたという意識もあるでしょうが、少しも喧騒さを感じません。話し声もかん高くなく、乱暴や粗暴なふるまいが殆んど見受けられませんでした。ですから、子どもらしい活気がなく、何か物たりない感じがしました。このことは寝そべって本を読んだり、足をなげだして玩具で遊んでいる米国の幼稚園でも同様でした。この静けさは、特にフランスにおいて著しかったです。パリのマルセイユにある公立幼稚園では、運動場がせまいので全幼児が出ると身動きできないほどですが、それでも騒がしく感じませんでした。私が写真を取っているのでまわりに一ぱい集って来ましたが、押し合いや、ボスが押しのけるというようなことはありませんでした。師範学校の附属幼稚園では、一人机にきちんとすわり、発言するにも、人さし指を立てて手をあげてやるなど、わが国の幼稚園から見ればどうかと思われるようなことも、その幼稚園の中に入って、全体的なふんいきから見ると決して不自然には感じません。

子どもたちがおとなしくって、しかも抑圧されているような感じを受けず、すなおであるということは、(それがよいかわるいかは別として)社会全体が、子どもの教育に対して、その大筋において一致し、安定していることを示すものであるといえましょう。またこのことは、子どもの教育に対して、或るきびしさがあるともいえましょう。例えば、コペンハーゲンの植物園が、四才位の幼児が鳩を追いとばした時に取った母親の態度、パリの幼稚園で子どもがいいつけに従わなかった時の教師の態度などにはおかすことのできないきびしさがありました。ニューヨーク市の六八幼稚園での朝の国旗掲揚式(学級でやっていた)では、私語やわき見をゆるさない厳粛なものでした。

(2) 教　師

幼稚園の先生はものごしが柔かく、親切であることはわが国の幼稚園の先生と同じです。ただこれは、それぞれの国の小学校の教師との比較においてであって、もちろん日本と欧米の先生とでは異ります。一般的にいって、わが国の先生はウェットで欧米の先生はドライであり、母親的に対してより教師的であるという感じを受けました。ですから、わが国の先生方にはより温さがあり、甘さがあるに対して、より冷たさと厳しさがあるといえましょう。また欧米の教師は誰に対してもたいとうな立場で対し、不当にへりくだったり、い縮したりしないので、一見不そんのようにも見えます。私が行っても、園長から紹介されれば挨拶をし、親愛の情を示すけれども、そうでない場合は

無視して指導を続けていました。このような傾向は米国において特に著しく感じました。欧州でよく聞いた「米国婦人はけちんぼで、ふそんだ」ということはが教師にもあてはまるようです。

教師の「事務的冷たさ」は初等教育においては最大の悪性ですが、幼稚園においては欧米においてもそれが薄いということを見出したのは何よりも嬉しかったです。もっとも、私が幼児教育関係者ということで、先方も親しみを持ったことにもよりましょう。けれども若い先生で、話をしたい、できるだけ話を聞きたいという様子を見せた人が多くあったこともまた事実です。

園長など管理的な職にある人は直接子どもに接することなく、管理的仕事に専念しているようです。熱心に、誠意をもって案内し説明してくれましたが、外来者と話すことによって少しでも自己を向上させようという意欲を示さぬ者が殆んどであったことは淋しく感じました。

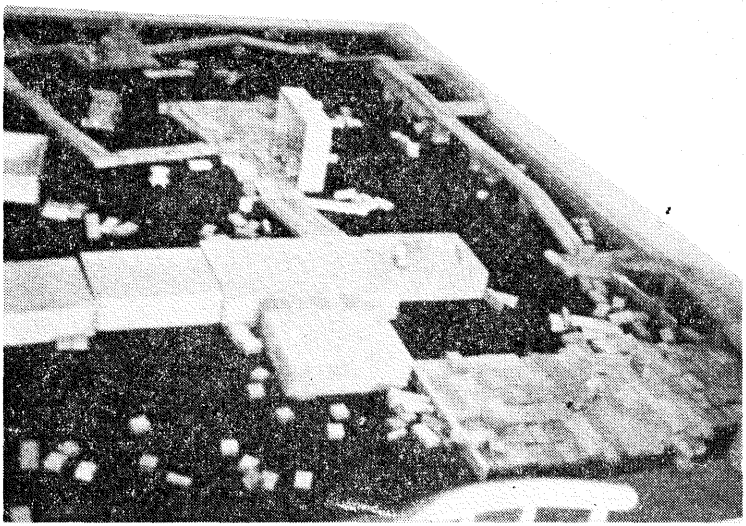
教師の待遇は他種の職業に比べて給与の低いことは世界共通ですが、小学校のそれに比べて殆んど差かないのが普通です。西独とイタリアでは幼稚園の教師は小学校の教師と別に養成しています。そして、西独では大学ではなく技術の学校の部類に入れられ、イタリヤでは、小学校の教師より一年間程修業年限が短かくなっています。それでも殆んど開きがないようです。ですからフランスやイギリスのように、小学校の教師と同一学校で同一年限を履修するところでは、その給与も全く同じであることはいうまでもありません。

次に、教師の不足、特に優秀な教員の不足は世界共通の問題で、どこに行っても話題になりました。

(3) 幼稚園の性格

一口に幼稚園といっても各国さまざまで相当異っています。在園する幼児の年令は、フランスは二才～五才、英国は二才～四才、イタリヤは三才～五才、西独は三才～五才（普通）米国は五才、シュネーフは三才～六才になっていました。共通なのは前に述べたように就学に近づくほど就園率が高いということです。就学前一年間の就園率を見ると、フランスでは九〇%、米国のニューヨーク・カルホルニヤ・ニューシャーシー・ミシガン・ビスコンシンなどの諸州では一〇〇%、シュネーフ市一〇〇%、ローマ市でさえ約九〇%です。このような高率を示すところでの共通点は、住民が子どもを幼稚園にやることが当然だと考えていることと、公立幼稚園では保育料を徴収していないことです。シュネーブ市の園長は「義務制ではないけれども、六才児は皆幼稚園に入ることになっています。そして事実みな入っています」といい、イタリヤ・フランス・イギリス・アメリカなどで「保育料はいくらですか」ときくと、「公立幼稚園は無料です」といい、「なぜですか」というと「小学校と同じ

ベルリン　幼稚園の積木



く学校だから」という返事でした。ですから、これらの諸国では、義務教育の学校と、そうでない学校との区別は義務就学であるかどうかということだけの区別のようで、わが国の考え方と大きな開きがあるようです。

幼稚園がより学校的であるか、より社会福祉施設であるかは国々によって相当異っています。米国のキンダーガーテンは名実ともに学校で、学令を一年引きさげたといっても過言ではありません。ナーサリースクールは午後までも指導しているし、年令も少ないので、家庭教育を補う面を多分に持っています。ですから、キンダーガーテンとナーサリースクールとははっきりと区別しています。私立ではキンダーガーテンとナーサリースクールとを併置しているのが殆んどですが、両者を区別して取り扱い、中には建物と運動場まで区別しているところもありました。そして、キンダーガーテンの方は年令が多いのに午前中で帰り、ナーサリースクールは年令が少ないのに午後まで指導しているところが多いです。英国のナーサリースクールは、デイナーサリー（社会保障施設）と管かつもちがうし、はっきり区別していますが、米国のナーサリースクールと大体において同様です。

イタリアの幼稚園は、公立は半日で私立は午後まで指導しています。ローマ市の係官の話では、私立は長時間教育することによって公立の無償に対抗しているということでした。ですから、ここも何れかといえば学校的性格が強いといえます。これらにくらべ西独はずっと趣を異にしています。西独の公立幼稚園には、小学校児童で放課後家に帰っても両親の留守な子ども

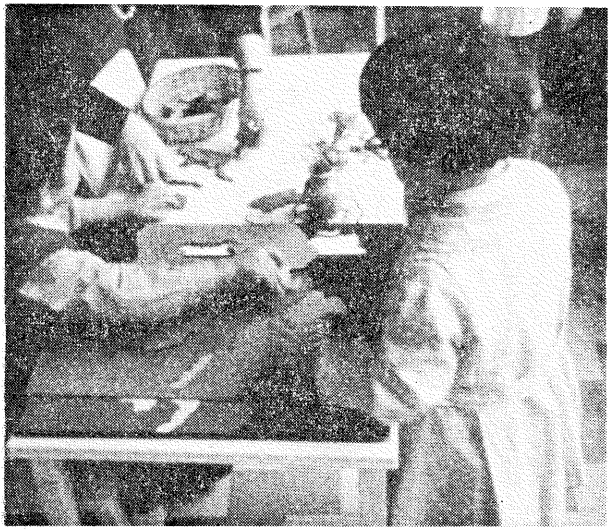
をあずかる施設を併置しているところが多く、また、智的・身体的未発達のため就学延期の児童をあずかるようにもなっています。なお、乳児や三才未満の幼児をあずかる施設を併置しているところもあります。ですから、西独の幼稚園は、米国のカリホルニヤ州のチャイルドケアーセンターの役割と幼稚園の役割とを兼ねたようなものです。保育時間は勿論午後までで、フランクフルト市では保育料を両親の収入に応じて段階づけています。ですから、幼稚園といっても、わが国の保育所といった方が適切です。

(4) 施設設備など

幼稚園の規模や園舎などは種々雑多で、わが国と同様です。便所等衛生設備は整っていますが、これも気候風土や慣習の関係上からきている面が多く、わが国と比較すればすぐれていると思われても、むこうとすれば当然だともいえましょう。保育室に、主として身仕度のための部屋を附属させている幼稚園もありましたが、寒冷地方では防寒具の着がえの必要性から要求されることだと考えられます。

園舎は公立では独立しているものもあれば小学校の一部を使用しているものもありました。私立では古い住宅を改造したものや住宅の一部を使用したものもあり種々さまざまです。運動場は一般にせまく、砂遊び場とジャングルジム(殆んどが木製)程度しかない幼稚園もあり、一般に固定遊具、特に回旋塔など動的遊具が殆んどないのが目だちました。また、いわゆる進歩的幼稚園と称するものの中には、空樽、空箱、古タイヤなどありとあらゆる廃物を並べたてているところもありました。

室内の設備や教具については、テレビ・ラジオ・スライドなどの視聴覚設備が殆んどないのには驚きました。私は幼稚園のスライドを持っていって見せたのですが、幻燈機を使用して見

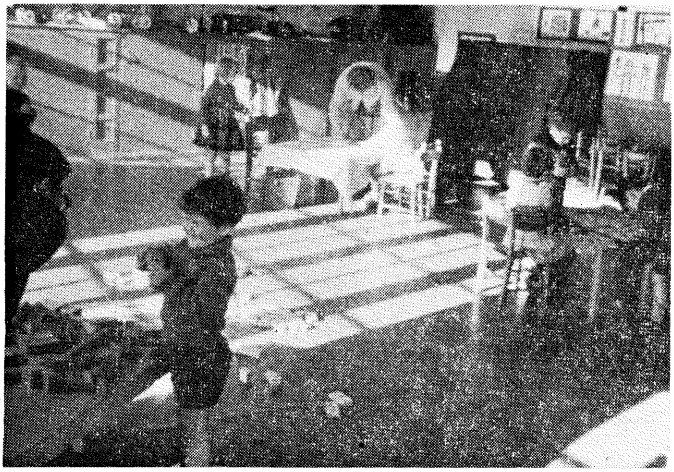


ローマ　モンテソリー幼稚園

ようとする者にはついに出会いませんでした。楽器も米国を除いては少ないことも特徴です。そして比較的多い米国でも、日本の幼稚園で使用しているような型にはまった楽器ではなく、粗末なもので、楽器というよりは音を出す用具といった方が適切と思われるものが多かったです。ニューヨーク市のInstitute for Developmental Studies（四才の幼児を教育しながらその発達について調査しているところ）で、日本の木魚が大小五個ならべてあったのにはちょっと驚きました。

ままごと用具（特に台所用具）はどこの幼稚園でも力を入れて取り揃えているようでした。大きさ・機能・材質などよく工夫されています。そして例えば、小さなハンがやけるトースター、ハンカチ位は洗える電気洗濯機、ボタンを押すと金高が表われるレジスターなど或る程度実際に使えるものが多いことが目立ちました。

ロンドン　ナーサリースクールの保育室



(5) 指　導

指導のことがらについては、まず、屋内での経験や活動が中心であるということです。例えば、北国の九・十月といえば、すべての人々が機会あるごとに屋外に出るようにしているのに、幼稚園では屋内の指導の方がずっと長いことです。またベルリンの幼稚園では子どもが運動場で遊んでいるとき、その指導は助手にまかせて、教師は次の指導のための保育室の環境設定や材料や用具の準備をしていました。米国の国際幼児教育協会では、カリホルニヤ州は土地も広いし、気候もよいので屋外の活動が盛んであるが一般にはそうでないというだけで、幼児の教育は屋外の活動が大切であるとか、気候のよくない地方では気候のよい時期にできるだけ屋外の活動をするように努力しているとかいうことは聞かれませんでした。ですから或る特殊

な幼稚園を除いては屋外遊具の研究や工夫は殆んど見られません。特殊な幼稚園とは、最近問題になっている子どもの冒険心の満足という観点から、運動場の設備や用具を考える立場をとる幼稚園です。例えば、古タイヤをつるしたり、空樽や車などの廃材を備えたり、防空ごうのようなものを設けたり、甚しいのは子どもが全裸で遊ぶ小屋を作ったりなどしている類です。

屋内の経験や活動と屋外のそれとの関係についても、あまり考えていないようです。例えば、屋内の遊びと屋外の遊びの連続性とか、気分転換など生活に変化を持たせるための意識的断絶とかいうことなどです。ロスアンゼルスの幼稚園では運動場に積木その他を持ち出していろいろの遊びをしていましたが、これも単に保育室でやるかわりに運動場でやっているという感じのものでした。なぜならば、教師が運動場の広さや自由に区切ることのできる空間や、立木やその他の設備など運動場の持つ特質を生かして遊ぶように指導しようという意欲を持っていなかったからです。

要するに、これらの現象は、運動場とは筋肉運動をする場所であるという観念が欧米の教師の間に支配的に残っていること、いわゆる進歩的といわれる人々も、せいぜい子どもの情緒の解放の場としての役割を附加することだけに止まっているということから生じていると思われます。私のところの広い運動場のスライドを見て、或る現場の指導者は、「日本は小さい国だと思ったのに、案外広いのですね」といっただけでした。

次に、保育室内の環境設定ですが、絵や自然観察の材料の展示などは各国とも大体似たようなものでした。また遊びに使う積木・色板・ままごと用具などのしまい場所やしまい方なども大体似通っていました。そして大体の幼稚園がすべての遊具や用具を保育室にならべたてている傾向があり、特に米国はこれらのはんらんといってもよい位ありとあらゆるものをところせましと置いてある幼稚園が殆んどでした。ただ英国の公立ナーサリースクールでは、「その時々の指導に必要なものを出して、それ以外のものは倉庫や戸棚にしまっておきます。ですから何でもかんでも無計画に出しておくことはしません」と説明していました。そしてその指導は、フランスのような、型にはまった、いわゆる一斉指導的な色彩の濃いものではなく、自由遊び的な色彩の濃いもので終始していました。

指導計画は、何時から何時まで何をやるといった日課表的なもので、それも教師の頭の中に習慣的に入っているものが多いようでした。また、遊び（Play）と仕事（Work）とをはっきりと区別し、この両者を子どもの立場に立って綜合的に見ることをしないような感じを強く受けました。その他、指導については多くの問題がありますが、要するに、指導面については、一般的にいって、わが国が最も進んでおり、わが国の教師が比類なく熱心であるということを再確認できました。（千葉大学）